

1. 認知資本主義論の概観

本報告では、オペライズモ・ポスト-オペライズモ系の論者（あるいはマルチチュード派）¹のいう「認知資本主義 cognitive capitalism」という概念を、やや限定された視角から敷衍する²。認知資本主義とは、たとえば Virno や Marazzi におけるポスト・フォーディズムという語に相当する。近年のレギュラシオン派などが資本主義の「多様性」を強調していることをふまえるならば、ポスト・フォーディズム／認知資本主義というものは、特定のレジームではなく、フレキシブルな蓄積という一般的な特徴で捉えられる「趨勢」として理解すべきであろう。

先に、レギュラシオン派におけるフォーディズムの規定を、かんたんに確認しておく。それは、大量生産と大量消費の循環によって可能になった、第二次大戦後の長期にわたる資本蓄積・経済成長の体制といえるだろう。大量生産を可能にするテーラー主義+機械化は、その代償として高賃金（生産性上昇の範囲内での賃金上昇）を労働者が得るという労使の妥協によって実現する。その安定した賃金上昇によって、持続的な大量消費が保証される。また、労使の妥協は団体交渉制度の確立にもとづく。さらに貨幣・金融面での制約、ケインズ主義の経済政策と福祉国家、戦後の国際関係の枠組などの制度的諸条件がこの蓄積パターンを支えた。70年代にフォーディズムが機能不全に陥って以降、グローバル化・情報化・サービス経済化・金融化といった、相互に重なりあう傾向の進展が、「ポスト」フォーディズムとしての資本主義をかたちづくっていくということになる。

認知資本主義という言葉は、どのように理解されるべきなのだろうか。

Fumagalli らにおいてこの語は、^{バイオ}生資本主義 bio capitalism・生経済 bio economy などの語と並べて用いられることが多い。ここでの「生」という接頭辞は、M. Foucault の生権力・生政治の概念に由来するとみてよいだろう。フーコーによれば、近代の権力は主権というよりも統治と相関する、「生かす」権力すなわち人

¹ A. Negri, M. Hardt, C. Marazzi, P. Virno, M. Lazzarato, F. Berardi (Bifo), A. Fumagalli, C. Vercellone ら。

² 主にマクロ経済的な観点から認知資本主義論を検討したものとして内藤(2009)がある。

間の生を対象とするミクロな戦略として理解される。ただし認知資本主義論の文脈を考えるならば、フーコーの議論自体よりもフーコーの影響を受けた Negri らにおける生政治の概念を参照することが近道と思われる。Negri らにとって権力の変質は、実質的包摂の深化を意味しているとみなしうる。資本制的生産の発展は労働過程を解体し再編成して資本の流通に価値増殖過程として組み込んでゆくのだが、それは人間の生・社会の総体が資本に包摂されるまでに至ると論じられるのである。生政治とは人間の生全体に資本の支配が及ぶ事態であり、同時にそれは、人間の生が直接に生産力となったこととしても把握される³。

そこにおいて労働は、さまざまな技能や作業ではなく、種としての人間の一般的能力の発揮となる。いいかえればそれは、言語を典型とする人間の認知能力である。認知資本主義という概念は、情報化やサービス経済化あるいは知識基盤経済などの語が指し示す状況を問題にしていると言ってよいのだが、その際に、情報通信技術や（財としての）情報／知識そのものよりも、それらを用いそれらを生み出す労働に重点をおくものと理解できよう⁴。いまや情報は希少であるどころか圧倒的に過剰と言うべきであり⁵、むしろその情報へ向けられる「注意」が希少なのである（Davenport & Beck のいうアテンション・エコノミー）。この非物質的労働（あるいは認知労働）が、フォーディズムからポスト・フォーディズムへの移行において決定的な意義を与えられる。Negri らの立論で重要なのは、この非物質的労働へのシフトは資本主義の転換によって強いられたものなのではなく、むしろフォーディズムに対する労働者の反抗によって先取りされていた、という見解である。認知資本主義とは、この労働者たち（≡マルチチュード）の主体性に適応しそれを組み込んだ資本主義なのである。

労働の変質は、フレキシビリティとコミュニケーションという2点から捉えられるだろう。両者は相互に結びついている。フォーディズムの少品種大量生産が行き詰まったことで、雇用形態においても労働内容においてもフレキシビリティが要請され、コミュニケーションが重視される。この状況において情報

³ この意味で、現代の資本主義において生産を担うのは狭義の労働者のみとは言えなくなるだろう。マルチチュードという概念の位置づけの一つはここに現われるとみることができる。

⁴ 流通しやすい一般的な状態におかれた知識が情報であると規定できる（Eymard-Duvernay, 2004）のに対して、知識とはアクターの認知的能力である（立見, 2008）といえる。情報と知識の区別という観点からも、「知識経済」なるものを「認知」の資本主義という問題として捉えなおすことは正当化されうる。

⁵ もちろんこれは、情報の非対称性といったこととは別の問題である。

伝達は新たな意義を持ち、コミュニケーション自体がフレキシブルでなければならない。ヴィルノの表現を借りて言うならば、社会の深刻な不安定化によって人間は擬似環境としての文化を喪失し、全く不確定な「世界」に放り出されてしまった。そこで人間の種としての能力＝言語能力の潜在性が、いわば露出され、使役されるということになる。

Lazzarato によれば、商品の情報的および文化的な内容を生産するのが非物質的労働である。古典的な物的財であってもそこに情報的・文化的内容は見出されるはずであるが、今日において商品を構成する「意味」が特段の重要性を持つに至ったからこそ、労働における非物質的な属性が前景化したと考えるべきであろう。それは情報化され著しく可変的になった製造労働であり、記号やイメージ・アイデアを操作し加工する労働であり、顧客と直に関わる対人サービス労働などである。これらのコミュニケーション的労働は知識や感情や人間関係の形成などと深く結びついている活動なので、その過程は社会的資源全般に依存している。またその性質上、労働のリズムは著しく不均質となり、勤務時間内に労働が完結しないことも珍しくない。いわゆる知的労働の場合は典型的だが、先に述べた資本による生の全体の包摂という観点からみても、生活と労働の区別が曖昧になるということが非物質的労働の特質の一つといえる（そしてここで労働の尺度の危機が主張されることになる）。これを消費の面からみると、商品の「意味」が重要になったということは、多くの商品が物的財であってさえ「サービス」になったということは、消費者が意味を読み取り、利用し、評価し、ときに表現するという積極的な関与がなければ、商品は商品として成り立たないということでもある⁶。消費、サービスの享受はときに非物質的労働の一部を担う。

ポスト・フォードイズムにおける労働はいわば狭義の経済領域から溢れ出すのだが、それは非物質的労働を機能させるエレメントである社会的資源・社会的関係を再生産する。「わたしたちは言語やシンボルやアイデア、共有された関係性といったものを基盤にしてのみコミュニケーションを行うことができるが、その結果、また新しい〈共〉的な言語やシンボルやアイデア、関係性が生み出

⁶さらにいえば、財・サービスとしての商品は、企業が演出する「ライフスタイル」を構成する一要素として位置づけられる、ということになるだろう。とりわけ、宣伝・広告がたんに量的に肥大したのみならず現代的なビジネスモデルの多くでシステムティックに機能していることにより、宣伝・広告が伝えるイメージの消費と商品そのものの消費を完全に区別することは困難になりつつある。

される」(Hardt & Negri, 2004)。言語や習慣が範例となる〈共〉あるいはコモン [common] の概念は非物質的労働にとって極めて重要である。非物質的労働は、コモンにもとづいてコモンの中でなされ、そしてコモンを生産するというのだから。〈共〉の問題は、標準的な経済理論においては「外部効果」として取り扱われているものとみなしうる。利潤を追求する資本主義企業としては、無形資産の強化、あるいはここでいう外部性をいかに内部化するかということが重要になる。

コモンという概念は、知のネットワーク、ネグリらがかつて論じていた「一般的知性」という概念の拡張としても解釈することができるだろう。マルクスは『経済学批判要綱』において、固定資本には科学技術が体化していると捉え、これを一般的知性とよんだ。すなわち知識は科学という歴史的形態をへて個人から分離し、機械装置という客観的な姿をとり、社会的な生産力となるのである。マルチチュード派はこの一般的知性を、固定資本ではなく、情報ネットワークにおける人間能力において捉える。それは「群知性」「集合知」「集团的知性」とよばれる考え方に近い。「近年の人工知能や計算方法の研究者は、集権的コントロールや大域モデルの準備なしに集团的・分散的に問題を解決する処理方式のことを群知性と呼んでいる。彼らは、これまでの人工知能研究の問題の一部は、知性を個別の頭脳に宿るものと考えていたことにあるとし、知性とはもともと社会的なものだと主張する。[...] 群がりとしてのシロアリは集権的なコントロールなしにひとつの知性システムを形成する。群がりの知性は基本的にコミュニケーションにもとづいているのだ」(同上)。

こうしてみると、現代の認知資本主義的な生産においては、非物質的労働をいかに引き出すか、コモンの知性をいかに醸成し取り込むかが大きな問題となると考えることができる。その場合、生産そのもののコントロールに比して、知的所有権の問題に典型的に現われているように、何らかの資源や技術などの占有にもとづき利益を獲得しようとする傾向が見出される。Vercellone などは、「利潤」というカテゴリーが「レント rent」(古典的にはこれは「地代」であったわけだが) というカテゴリーと次第に不分明になっていく、利潤がレント化すると指摘している。

2. 情報環境におけるコミュニケーションの動員

さまざまな情報が行き交いコミュニケーションが不断に生み出されるインタ

インターネットは、一般的知性の大海ともいえるだろう。コモンとしてのインターネット、そしてそこで展開される現代資本の活動は、本報告にとって一つのサンプルとなりうる。ここでは、Google およびさまざまな SNS がいかに利益を生み出すのかを大まかにみておきたい。「インターネットの主権はユーザーにあるという黎明期からのポリティカル・コレクトネス」(チェン, 2011) ゆえに、またいわゆる「ユビキタス」「クラウド化」といった言葉に示されるような、情報処理速度・通信速度・データ容量の劇的な向上にもとづいた情報環境のおかげで、わたしたちはこれらのサービスを「フリー」で利用できるのだが、いうまでもなくそのサービスは慈善事業として提供されているわけではない。

そもそも Google のような検索エンジンや各種 SNS などは、「それ自身ではいかなるコンテンツも生産しない」(Pasquinelli, 2009)。日本における代表的な動画サイトのニコニコ動画を運営するドワンゴの取締役である夏野剛は、次のように語っている。「ユーザーはコントロールできませんから」。「まずはユーザーの利便性を向上させる。ユーザーが楽しくなきゃということをまず考えて […] その上でどういうビジネスモデルが考えられるか」。(夏野, 2011)。ニコニコ動画はいわゆるフリーミアムの仕組み(サービスの一部が有料)によって黒字化したのだが、言わずもがなの前提として、Youtube などと同様、ニコニコ動画のサービスを利用するユーザー自身が動画をアップするということがある。ユーザーはコンテンツを制作し提供するという無償労働をおこなっているともいえよう。動画サイトは、使い勝手のいい「場所」を貸し出そうとするのだが、そこで多数のユーザーが表現をくり広げることではじめてサービスが成り立つ。またニコニコ動画の場合、動画の閲覧者が画面上にコメントを書き込めること、そこで発達した独特の手法と文化が魅力とされている。つまり、ユーザーが自発的にアップしたコンテンツを見る別のユーザーたちが次々にコメントすることで、そのコンテンツの「価値」が高まるということになる。「コンテンツの価値はコメントによって倍になっていると思います」(同上)。ニコニコ動画の特殊性はもちろんあるが、さまざまな SNS の基本的な発想は同様と考えてよいだろう。すなわちユーザー自身がサービスの中身を生み出しているのだが、そのためのツール、コミュニケーションを促進する環境を提供するのが SNS なのである。

これは、「情報のメタ次元を根拠とする」(Pasquinelli, 2009) 利益の創出とと

らえることができるのではないだろうか。このことは、Google の事例⁷においてはより明確に現われる。現在 Google の収益のほとんどは広告収入⁸によって占められているが、その広告収入をもたらす力が検索エンジンの性能にもとづいているということは自明であろう。それは、「日々増大し続ける膨大な量のウェブページをクロールし、評価と索引（インデックス）化を行うアルゴリズムをどれだけ高速化できるかという技術的挑戦として始まった」（チェン, 2011）。その検索アルゴリズムとして有名なのが「ページランク」である。ページランクのアイデアは、学術論文の引用頻度の計測システムからヒントを得ている。すなわち、「多くの論文に言及されている論文は価値が高い」という発想が、「ウェブ上の多くのページからリンクされているページは価値が高い」という発想へと移し替えられている。この原理にもとづくことで Google は情報の重み付けを計算し、任意の語句の検索結果を階層化することで可視化する。インターネットは水平的でフラットなネットワークではなく、非対称的なベクトルの集合からなる。この不均質なネットワークにおける価値の諸関係に統合的な秩序を与え表示するがゆえに、Google はインターネットの世界におけるある種の覇権を獲得しえたのである。ユーザーは Google に囲い込まれてしまうわけではない。しかし「グーグルで検索をするたびにユーザーは、ターゲット広告のためのアルゴリズムにグーグルが磨きをかけるのを助けている」（Anderson, 2009）。Google は「インターネットの情報を所有しないが、情報を生産した集合的知性にアクセスし計測するための最速のダイアグラムを所有している」（Pasquinelli, 2009）がゆえに、「情報のメタ次元」における特権的地位を築き上げることができた。少なくとも現時点において、この「計測器」を利用するためならレントを貢納することも厭わない企業が非常に多いのは確かである。

SNS や Google などにおいて見出されるのは、いわゆるクラウドソーシングの極北ともいうべきモデルではないだろうか。すなわち、「生産手段は大衆の手に渡しておきながら、その共同作業の産物に対する所有権を大衆に与えないことで、ワールドワイドコンピュータは多くの人々の労働の経済的な価値を獲得し

⁷ Google についてはその組織・人事労務管理のあり方という観点からも興味深い。一言でいえば、Google は従業員から非物質的労働を最大限引き出すためにさまざまな大胆な方法を用いている。Google に限定されない文脈でこの点に関わる議論として山本(2009)、村越・山本(2010)を参照されたい。

⁸ インターネットにおける広告手法の重要性は疑いえないが、ここではふれない。さしあたりチェン(2011)などを参照されたい。またこの点と関わって、Google や Amazon が膨大な個人情報を保持していることも重大な問題である。

て、それを少数の人々の手に集約するための極めて効率的なメカニズムを提供している」(Carr, 2008)。認知資本主義論はこの趨勢について、それは利潤のレント化に帰着すると要約した。金融化という問題をも射程に入れるこの規定は考慮に値するものであるが、さらなる検討を要するだろう。また、このクラウドソーシング・モデルは、工場というヒエラルキー組織が確立される前に一般的なモデルであった問屋制を想起させる。

3. コモンの捕獲

ここまでの考察は、いくぶん偏った対象領域における状況の粗描に制限されていた。直観的には、コモンという概念、および資本主義企業によるコモンあるいは「脳の協働」の「捕獲」という視角は理解できるように思われるが、そのパターンをより明確な形で捉える必要があるだろう。山本(2011a)でも述べたようにマルチチュード派の議論は分散認知など近年の認知科学の成果を参照しており、コンヴァンション理論やアクターネットワーク理論などのフランスの社会経済学の知見とも通じる面があると言える。そこで、須田(2010)が Hennion らに依拠して論じている「テイスト」の概念をここで導入してみたい。

テイストの概念は、標準的な経済学における「選好」の概念と対比できる。教科書的なミクロ経済学において、消費者の選好は個人的かつ外生的であり、また少なくとも中期的には不変である(社会状況の変化によって需要関数がシフトする可能性について、断片的に言及されることがないわけではないが)。これに対してテイストとは、財と個人の直接的突き合わせ、所与の事物の特性の解読ではなく、またブルデューにおけるように社会的地位の再生産のあらわれでしかないものでもない。それは集散的・制度的に形成され更新される品質であり評価の遂行である(嗜好/風味⁹)といえよう。一方コモンとは、言語・習慣・知識などのような共有された社会的資源や関係性として理解されるものであった。非物質的労働との関連においてそれは、消費者がある意味で生産者でもあり、彼らがネットワークを形成する、という状況の描写でもある。とはいえ、いわゆるプロシューマーの姿を一足飛びに一般化するというやり方ではなく、従来その内実を縮減されてきた「消費」という概念を、より厚みのある社会的実践の一契機として位置づけ直すという方向において、コモンを捉え返す

⁹ 「英語の *taste* やフランス語の *gout* という単語は、事物の持つ風味や味を示すと同時にヒト・エージェントがある事物に対して有する嗜好や好みを示している」(須田,2011)。

こともできる。その限定された一側面としてテイスト概念の枠組を適用することが可能なのである。

テイストは、以下の4つの要素から構成される。1、事物。やや意味が狭くなるが、さしあたりこれを「財」と言い換えてもよいだろう。あらためて確認しておけば、事物を孤立させてその特性を記述するという想定は意味をなさない。もちろん、モノとしての事物（物体とは限らないが）を抜きにしてテイストを云々することも意味をなさない。また事物は複数の実体の集合である。2、集団。一つの身体あるいは個人が事物に関わるだけでは、テイストは存在し得ない。他者による評価の蓄積、それらの共同の絶えざる再検討がテイストを構築する。また、テイストを産出し表現する評価の言語が、集団により生み出され共有される。3、デバイス。人間の事物への、また他の人間への関わりにおいては、つねに何らかの具体的な道具や規則が用いられる。テイスト実践はすぐれて手続き的なものとなっている。「媒介の連鎖を通じて遂行されるテイストは、高度に装置化され、状況に位置づけられた集合的活動なのである」（須田,2010）。4、身体。個人が備える感性や評価能力もまた、たんなる自然的所与につきるものではなく、学習によってこそ事物の効果を認知し他者と共有できるようになるという意味で、社会的構築物であるといえる。ただしそれはただ受動的であるのではなく、反省的[réflexive]にテイストを更新し、また身体感覚それ自身を更新していくのである¹⁰。

この図式を、コモン概念に重ね合わせることができる。すなわちコモンとは、事物・集団・デバイス・身体という4つの要素から構成されるネットワークである。とりわけ、デバイス（装置）[dispositif, device]は重要である。媒介的事物=媒介的制度を軽視することが重大な過誤を招くことは、経済学における貨幣の問題を想起すれば容易に理解されることだろう。しかしここでデバイスが重要なのはそのような一般的理由からだけではない。いわゆる情報化の歴史を振り返れば典型的に明らかのように、集団が実際にネットワークとして構成される際、そこで用いられるデバイスが、ネットワークの形態および性質を強く規定するからである¹¹。

コモンという概念は、それがフォーマルな世界（たとえば“public”¹²）とは

¹⁰ 深い意味でサービス経済化した現代資本主義において、「テイスト」が企業活動にとって重大な意味をもつことは、注4で述べたような観点からも十分理解できるだろう。

¹¹ この点について、G. Tardeを再検討するLazzarato(2004)は示唆的である。

¹² 逆に“private”は、publicの領域との区別によって定義される概念であるため、common

異なる次元を指し示そうとしているが故に、漠然としたものにならざるをえない。資本主義企業にとっても、コモンは自律的に生成するものであるが故に、いわば潜在的なネットワーク（あるいは外部性）といえる。企業がコモンを「捕獲」するためには、目に見える、操作可能な形をネットワークに与えるべく介入しなければならない。デバイスはまさにその足がかりになりうる要因であり、Thévenot の言葉を借りるならば、ここでこそ「フォーラムの投資」がおこなわれると考えられる。企業はデバイスを積極的に提供することでネットワークを再構成し、集団がおこなうコミュニケーションのチャンネルを整備する。このようにして、企業の外部で叢生するコモンの知性（あるいは集散的に形成されるテイスト）が参照・集計可能なものとなる。そこに所有権の構造という楔を打ち込むことで、コモンが生み出す「価値」からレントを引き出すメカニズムが構築される。

他方で、コンヴァンション派の諸研究からも類推されうるのだが、このような企業戦略も規範的見地からの価値判断を免れ得ない。じっさい、すでにふれたように、「知」をめぐって、レントの根拠となる所有権がいかにか正当化されるのかが現在進行形で問題となっている。興味深い例として海賊党を挙げることができるだろう。2006年にスウェーデンで設立された政党である海賊党は、著作権法の改正・特許システムの廃止・ファイル共有ソフトの合法化などを主張しており、世界各国で相次いで結党されている¹³。こういった状況からみても、認知資本主義の帰趨は決して確定したものとは言えないだろう。

結びにかえて

本稿では、認知資本主義論を概観し、コモンの捕獲のメカニズムを描き出すことを試みたが、レントの問題についてはわずかな指摘にとどまっている。ポスト・フォーディズムにおけるレントについての検討がなされ、コモンとレントの関係を明らかにすることが今後の課題として残されている。

参考文献

のようなあいまいさはない。

¹³ 海賊党は欧州議会において2議席を有する。また、2011年9月のベルリン市議会選挙ではドイツ海賊党の得票率は8.9%に達した

(<http://sankei.jp.msn.com/world/news/110919/erp11091920360004-n1.htm>)。

- Anderson, C. (2009) *Free: The Future of a Radical Price*. Hyperion. (高橋則明訳『フリー』日本放送出版協会、2009)
- Batifoulier, P. (ed) (2001) *Théorie des conventions*. Economica. (海老塚明・須田文明監訳『コンヴァンション理論の射程』昭和堂、2006)
- Berardi, F. (1997) *Dell'innocenza. 1977: l'anno della premonizione*. Ombre Corte. (廣瀬純・北川眞也訳『NO FUTURE イタリア・アウトノミア運動史』洛北出版、2010)
- Berardi, F. (2009) *Precarious Rhapsody: Semiocapitalism and the pathologies of post-alpha generation*. Minor compositions. (櫻田和也訳『プレカリアートの詩』河出書房新社、2009)
- Bessy, C. et Favereau, O. (2003) *Institutions et économie des conventions*, *Cahiers d'économie Politique*, no.44. (須田文明・山本泰三訳「制度とコンヴァンション経済学」四天王寺大学紀要、第53・54号、2011、印刷中)
- Carr, N. G. (2008) *The Big Switch: Rewiring the World, from Edison to Google*. W. W. Norton. (村上彩訳『クラウド化する世界』翔泳社、2008)
- チェン, D. (2011) インターネット時間と自然時間の調停, 現代思想, 第39巻第1号
- Davenport, T. H. & Beck, J. C. (2001) *The Attention Economy*. Harvard Business School Press. (高梨智弘・岡田依里訳『アテンション!』シュプリンガーフェアラク東京、2005)
- Eymard-Duvernay, F. (2004) *Économie politique de l'entreprise*. Decouverte. (海老塚・片岡・須田・立見・横田訳『企業の政治経済学』ナカニシヤ出版、2006)
- Fumagalli, A. & Lucarelli, S. (2007) A model of Cognitive Capitalism: a preliminary analysis, *European Journal of Economic and Social Systems*, vol.20, no.1.
- Fumagalli, A. & Mezzadra, S. (eds) (2009) *Crisi dell'economia globale. Mercati finanziari, lotte sociali e nuovi scenari politici*. Ombre Corte. (朝比奈佳尉・長谷川若枝訳『金融危機をめぐる10のテーゼ』以文社、2010)
- Hardt, M. & Negri, A. (2000) *Empire*. Harvard University Press. (水嶋・酒井・浜・吉田訳『帝国』以文社、2003)
- Hardt, M & Negri, A. (2004) *Multitude*. Penguin Press. (幾島幸子訳『マルチチュード [上] [下]』日本放送出版協会、2005)
- Lazzarato, M. (1996) Immaterial labour, in P. Virno and M. Hardt (ed) *Radical Thought in Italy*, University of Minnesota Press.
- Lazzarato, M. (2004) *La politica dell'evento*. Rubbettino Editore. (村澤真保呂・中倉智徳訳『出来事のポリティクス』洛北出版、2008)
- Marazzi, C. (1999) *Il post dei calzini: La svolta linguistica dell'economia i suoi effetti sulla*

- politica*. Bollati Boringhieri. (多賀健太郎訳『現代経済の大転換』青土社、2009)
- Marazzi, C. (2002) *Capitale & Linguaggio: Dalla new economy all'economia di guerra*. DeriveApprodi. (柱本元彦訳『資本と言語』人文書院、2010)
- 村越一夫・山本泰三 (2010) コーティングという言説：ポスト・フォーディズムにおける労務管理, 進化経済学論集 14
- 内藤敦之 (2009) 認知資本主義論：ポストフォーディズムにおける新たな労働, 進化経済学論集 13
- 中原隆幸 (2010) 非物質的蓄積体制と政治的なるもの, 経済理論学会第 58 回大会報告
- 夏野剛 (2011) ニュニコ動画のコアにあるもの, ユリイカ, 第 43 巻第 2 号
- Negri, A. and Vercellone, C. (2007) *Il rapporto capitale/lavoro nel capitalismo cognitivo, Posse* Ottobre 2007. (長原豊訳「認知資本主義における〈資本-労働〉関係」現代思想、第 39 巻第 3 号、2011)
- Pasquinelli, M. (2009) *Google's PageRank Algorithm: A Diagram of Cognitive Capitalism and the Rentier of the Common Intellect*, in K. Becker, F. Stalder (eds), *Deep Search*, Transaction Publishers. (長原豊訳「グーグル〈ページランク〉のアルゴリズム」現代思想、第 39 巻第 1 号、2011)
- 渋谷望 (2003) 魂の労働. 青土社
- 須田文明 (2004) 知識を通じた市場の構築と信頼：コンヴァンション理論とアクターネットワーク理論の展開から, 進化経済学論集 8
- 須田文明 (2005) 「見える手」による市場経済の遂行：アクターネットワーク理論とコンヴァンション経済学の間で, 進化経済学論集 9
- 須田文明 (2008) 事物と装置：構築主義的社会経済学の宣揚, 経済学雑誌, 第 109 巻第 1 号
- 須田文明 (2010) 品質のコンヴァンションと評価のプラグマティズム：ワイン批評を事例に, 経済理論学会第 58 回大会報告
- 立見淳哉 (2008) 知識、学習、産業集積：認知と規範をつなぐ, 経済学雑誌, 第 109 巻第 1 号
- Vercellone, C. (2007) *From formal subsumption to general intellect: Elements for a Marxist reading of the thesis of cognitive capitalism*, *Historical Materialism* 15, 2007. (沖公祐訳「形式的包摂から一般的知性へ」現代思想、第 39 巻第 3 号、2011)
- Virno, P. (2001) *Grammatica della moltitudine: Per una analisi delle forme di vita contemporanee*. Rubbettino Editore. (廣瀬純訳『マルチチュードの文法』月曜社、2004)
- Virno, P. (2003) *Scienze Sociali e "Natura Umana": Facoltà di linguaggio, invariante*

biologico, rapporti di produzione. Rubbettino Editore. (柱本元彦訳『ポスト・フォード
イズムの資本主義』人文書院、2008)

山本泰三 (2009) ポスト・フォードイズムにおける労働と企業：コーチングを手がかり
として, 経済理論学会第 57 回大会報告

山本泰三 (2011a) コミュニケーションの動員：認知資本主義論についてのノート, 季報
唯物論研究, 第 116 号

山本泰三 (2011b) 非物質的労働の概念をめぐるいくつかの問題, 四天王寺大学紀要, 第
52 号